平和を想う

私立沖縄尚学高等学校附属中学校　二年
有銘　真之助

六月二三日、慰霊の日、糸満市摩文仁の平和祈念公園では、毎年のように戦没者追悼式が行われる。平和の礎には、刻まれた名前に花束を供え、涙を流して手を合わせる人や、戦没者に語りかける参拝者の姿があった。

これは、毎年のように僕がテレビや新聞で目にする光景だ。僕にとって、平和祈念公園は、悲しみに満ちた暗い場所というイメージがあった。

五月二日、家族で平和祈念公園へ出かけた。戦後七〇年の今年僕は初めてそこへ足を運んだ。その日はゴールデンウィークの初日で、大小様々なこいのぼりと共に、クレーン車で特大こいのぼりがあげられていた。

五月晴れの公園には、家族連れや観光客、外国人も多く、にぎわっていた。木かげにレジャーシートを敷き、弁当を広げる者、親子で凧あげを楽しむ者、サッカーをする若者、そしてのんびり昼寝をする人。そこには、僕がイメージした悲しみもなく、暗さもない、「平和」そのものだった。

にぎやかな広場を抜け、平和の礎へと向かう。慰霊の日と違って、参拝する人の姿はなく、ひっそりとしていた。国籍を問わず、戦没者二四万人余りの名前が刻まれた平和の礎。いつ、どこかで亡くなったか分からず遺骨もない戦没者の名前も多くあるという。また、戦後七〇年たった今もなお、毎年のように追加刻銘されているという事実を知り、この戦争が残した傷の深さを思い知らされた。

礎からさらに進むと、平和の火があり、その奥に、摩文仁の海岸が姿を現した。その日は、快晴で波も穏やか。美しいこの海岸が、悲劇の舞台となった。敵から逃げて追いつめられた人々が、死を覚悟してこの絶壁から身を投げ、多くの尊い命が失われた。どんなに怖かっただろう。恐ろしかっただろう。海岸を眺めながら僕は、死ではなく、生きることを選択してほしかったと心から思った。同時に、戦の世では、選択肢はないという残酷な現実をつきつけられた気がした。

再び、広場へと戻った僕たちは、特大こいのぼりの真下を歩いた。こいのぼりが風にゆれると、地面に特大の影をつくり、照りつける太陽をさえぎる。母が妹の車椅子を押しながら、その影を追いかけていた。その様子を見ていた僕は、ふと妹のことを考えた。

僕の妹は、生まれつき障害があり一人では何もできない。つまり、家族やまわりの人の助けなしでは生きていけないのだ。今が戦の世の中だったらどうだろうか。皆、自分の事で精一杯。他人の事など構ってはいられない。そんな中、僕や家族は妹を守れるのだろうか。妹のように何らかの障害を持った人や大病を患っている人などは、平和な世の中でなければ生きていくのは難しいのかもしれない。

では、平和は世の中とはどのようなものか。

朝目覚めてから夜寝るまで、安心して普通の生活ができること。よりよく生きるためにどうすればいいのかを考え実行できること。幸せになるための選択肢がたくさんあって、自分の意志で自由に選べること。そして、互いを思いやり、助け合えること。さらに、自国だけでなく世界中の国々を、自由に生き来することができ、お互いを正しく理解し合うこと。平和な世の中だからこそ、できることがたくさんあるはずだ。

初めて訪れた平和祈念公園。その日目にした光景は、憎しみや悲しみのない平和そのものだった。

「平和な世の中、平和な国日本に生まれて本当に良かった。」

僕は改めて、その思いを強くした。

今この瞬間、世界のどこかで多くの尊い命が奪われているという現実。平和主義の日本でさえ、戦後七〇年経った今なお、辺野古への基地移設といった過重な基地負担を沖縄に強いている。また、戦争を連想せざるをえない集団的自衛権が議論されるなど、平和が脅かされている。

もう二度と礎に名前を刻むことがないよう、平和を守ること、創造することが、僕たちの使命といえるだろう。